

一心寺かわら版

HP



第六十四号 令和七年三月発行

持名山一心寺

検索

浄土真宗と平和く千鳥ヶ淵戦没者墓苑に参拝して

真宗教団連合（浄土真宗の十派の連合）の一員として、初めて国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑に参拝しました。

この墓苑は、昭和三十四年（一九五九年）に国によって建設され、戦没者のご遺骨が埋葬されています。第二次世界大戦では、広範な地域で戦闘が展開され、海外の戦場において多くの方が戦没されました。戦後、ご遺骨が日本に持ち帰られましたが、ご遺族に引き渡すことができなかったものが、この墓苑の地下三階建ての納骨室（右下写真）に収められています。いわば「無名戦士の墓」ともいえる施設です。

二〇二四年十月現在、三十七万四百六十七名のご遺骨が納められています。総戦没者数は、軍人・軍属・一般邦人を合わせて約三百十万人とされています。



遺骨の収集は政府と民間によって毎年継続されており、この二月にも二十名ほどのご遺骨がこの墓苑に安置されるということです。また、近年はDNA鑑定技術の進歩により、戦没者の子孫とのDNA照合が可能となり、これまでに約千五百名の戦没者の身元が判明し、ご遺族のもとへ帰られたとのことでした。

初めてこの墓苑を訪れて感じたのは、テレビなどで想像していたよりも施設が小規模であるということです。当日、訪れている人もそれほど多くありませんでした。

これは、この墓苑が無名戦没者の納骨所であることが大きな要因ではないかと思われれます。特定の個人の墓所であれば、家族や親族が手を合わせに訪れるでしょう。しかし、身元不明の戦没者が祀られているため、ここに参拝しようとする人が少ないのかもしれないかもしれません。国立の施設として設置するのであれば、無名戦没者に限らず、すべての戦没者を追悼する施設とすべきでしょう。

また、礼拝所が皇居の方向を向いており、昭和天皇の「国のためのちささげし人々のことを思えばおねせまりくる」という句碑が建てられています。戦後十四年を経過していたとはいえ、建設当時の社会状況を反映してか、「無宗教施設」とされながらも、天皇崇拜が色濃く残っていると感じました。



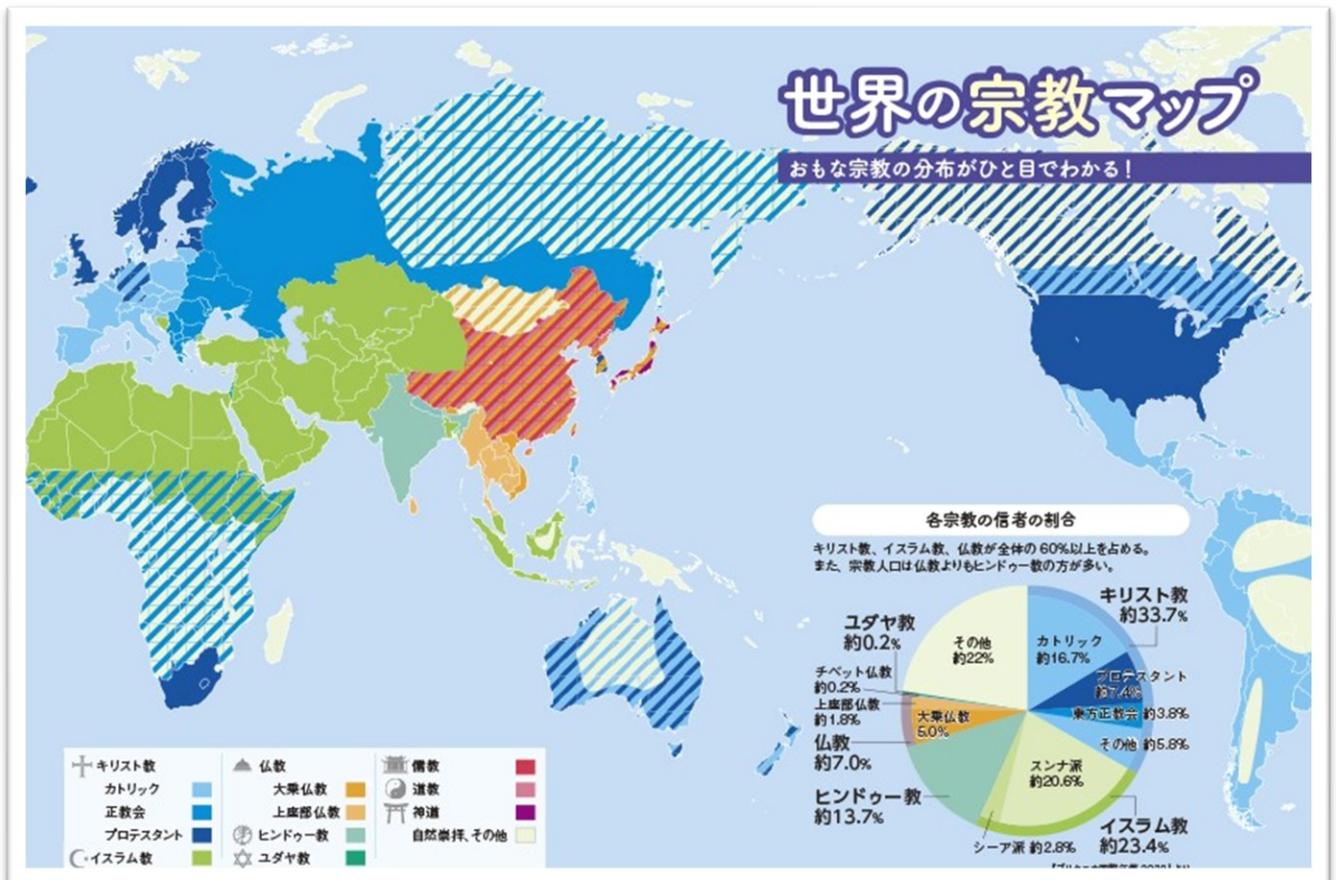
ただし、礼拝対象となる特定の宗教的シンボルは設置されておらず、礼拝時には各宗教がそれぞれのご本尊をお祀りすることが認められています。浄土真宗本願寺派では、毎年九月十八日に全戦没者追悼法要（上写真）が執り行われています。

今年で戦後八十年。私が一心寺に帰り、お参りを始めてから二十八年が経ちました。当時は、明治・大正生まれの方も多く健在で、戦前・戦中の体験談を直接伺うことができました。しかし、時代の流れとともに、そうしたお話を聞く機会もほとんどなくなりました。

この八十年間、日本は戦争をすることなく過ごすことができましたが、世界には今なお戦争が続いている国や地域もあります。その中で、日本が平和を享受し続けられていることは、大変有難いことです。

日本は仏教国ともいわれます。イスラム教やキリスト教などの一神教は排他的であるため、争いが起こりやすいのに対し、日本は多神教の文化を持つため、平和的であるという意見があります。

世界で、仏教が多く信仰されている国は日本を含めてたったの七%、それに対して、キリスト教は約三十四%、イスラム教は二十三%です。（下図）人々を幸せにするはずの宗教が争いに影響しているならば、悲しいことです。



お釈迦さまは「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」（『ダンマパダ』）と説かれています。

また、「仏の歩み行かれるところは、国も町も村も、その教えに導かれないうところは無い。世の中は平和に治まり、武器を取って争うこともなくなる」（『仏説無量寿経』）とあり、暴力、争いを強く抑止されています。

親鸞聖人も「仏のちかいをも聞き、念仏も申すようになってからすでに久しくなっておられる人々には、この世のわるいことを厭うし、この身のあしきことを厭いすてようと思いになるしるしもあるにちがいないと思われるのであります」（『親鸞聖人御消息』）と述べられ、お念仏を称える者は、悪しきことを嫌い、避けようという思いになると説かれています。

しかし、『歎異抄』には、弟子の唯円との問答として次のようなやりとりがあります。

あるとき、親鸞聖人が唯円に「私の言うことを信じるか」と尋ねました。唯円は「信じます」と答えます。すると聖人は「どう問いかけます」。

「例えば、私が『人を千人殺したら浄土に往生できる』と言ったら、どうするか」。唯円は「私には千人どころか、一人も殺すことなどできません」と答えます。

すると聖人は「どう続けます」。

「ではなぜ、私の言うことを信じると言ったのか。これで分かっただろう。もし、自分の意志だけで行動を決められるのなら、浄土に往生するために千人を殺せと言われたら、殺してしまうのではないか。しかし、一人として殺すことができないのは、ただ人を殺す縁が備わっていないからである。自分の心が善いから殺さないのではない。また、いくら自分は善い人間だから殺さないと思っても、状況次第では百人、千人を殺してしまうこともあるのだ。」

人間は、「自分はこうする」とどれだけ考えたとしても、状況次第で何をするか分かりません。ある日突然、理不尽に殺されるかもしれない、あるいは自分が人を殺してしまうかもしれない。

「自分だけそんなことはしない」「自分だけはそんな目に遭わない」と考えるのは、ただの思い込みに過ぎないのです。

戦国時代には一向一揆が起りました。その中心となったのは、浄土真宗の門徒たち、お念仏を称えていた人々です。

戦乱が続き、重い年貢や軍役の負担に苦しめられていた彼らは、「殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」というお釈迦さまの言葉や、「この世の悪しきことを厭い、この身の悪しきことを厭い捨てよう」という親鸞聖人の教えを理解していたにもかかわらず、一揆を起さずにはいられなかったのでしょう。

また、浄土真宗各派は、先の大戦に協力した事実を認めています。真宗大谷派は、戦後の声明の中で次のように述べています。

「過去において、大日本帝国の名の下に、世界の人々、とりわけアジア諸国



三河一向一揆を描いた浮世絵
「三河後風土記之内 大樹寺御難戦之図」



の人々に言語に絶する惨禍をもたらし、佛法の名を借りて将来ある青年たちを死地に赴かしめ、言いしれぬ苦難を強いたことを深く懺悔し、不戦の誓いを表明しました。(中略) 如来の願心は「賜ったいのち」を奪い合うことを悲しみ、私たちに「共に生きよ」と呼びかけておられることを確かめ、「殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」という仏陀の言葉を如来の悲願として受け止めたのです。」

このように、浄土真宗各派は戦争への関与を深く反省し、不戦の誓いを立てました。

私は「この世の悪しきことを厭い、この身の悪しきことを厭い捨てよう」と思っても、状況次第では何をするかわからない存在です。だからこそ、お釈迦さまの教えや親鸞聖人の言葉を、これからも聞き続けていかなければならないでしょう。

仏教伝道協会が毎年発表する「願いの一字コンテスト」で、二〇二五年の一字は「慈」が選ばれました。他者に対する優しさ、思いやりを意味する「慈」、今の時代に不可欠な心でしょう。

お釈迦さまの「殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」、親鸞聖人の「この世の、この身のあしきことを厭いすてよ」と思いを心に刻み、慈しみの平和な世界を願いたいものです。

報恩講報告

一月十日、報恩講が勤まりました。法話は川田信五氏。

念仏、信心は智慧ある人を育むものである。智慧とは「本当に気づく心」のことをいう。本当に気づくことがなければ、人生は空しく過ぎていってしまう。私たちはお正月に神仏にさまざまな願い事をする。しかし、それは多くの場合、自分勝手な心から生じている。そのことに気づかせていただくのが、仏の教えである。信心によって生まれるのは、喜びと感謝、そして報恩の心である。その心を持つことで、私たちは人生を本当に生きることができると、と聞かせていただきました。

お知らせ

お彼岸の中日より、札幌別院を皮切りに、北海道の八カ寺を布教に回らせていただきます。

香川県からも多くの開拓者が移住した北海道。真宗興正派の北海道開教が本格的に始まったのは、明治二十七年（一八〇四）。現在は五十九ヶ寺がお念仏を伝えていきます。

北海道布教の間はお参りができず、皆さまにはご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

